

## 閉会に当たって

山口 博

学会シーズンもそろそろ終わりにかけています。日本文学関係は実に多くの学会がひしめいており、それぞれ有意義な研究発表が行われたことと思いますが、日本文学に限らずどうも日本の学会はミクロな発表が大勢を占め、マクロな発表は育ちがたい趨勢にあるようです。そのような中であって、本研究集会はマクロな研究を育てる最先端を行っているのではないのでしょうか。他の学会の発表とはベクトルの方向の異なることが、生命であるかと思います。毎年、二日間の発表と、講演を聞きますと、研究の世界が無限に広がっていくような、研究の意欲の掻き立たせられるような、夢がふくらむような、充実した気持ちになれるのです。今年もそうでした。

平成9年度以来の統一テーマ「境界と日本文学」の「境界」には、多種多様の意味を持たせています。本年度のサブタイトル「画像と言語表現」は、昨年度の「翻訳とその周辺」の「翻訳」が文化の翻訳と広義に解釈できることから、発展的に生まれたものです。小池正胤氏の講演サブタイトル「文学と美術のはざま」が最もオーソドックスな「境界」でしょうか。

リン・K・ミヤケ氏は「画像は千の言葉に匹敵するか」と直截に迫り、「日本人は絵が語りかけることに不感症なのではないか」という意味のことをおっしゃいましたが、今回のテーマはそれを克服するための方法の模索といってよいでしょう。

いったい、画像は文学に必要なのか、本文と絵が共生し得るのか、画像と言語表現との境界を超えるのは何か等々の問題が生じてきます。松野陽一館長は開会挨拶で、版本『千載集』『平忠度集』に本文と関係のない絵が挿入されて

いることへの疑問を提示されました。モストウ氏の「百人一首の絵画化」は、絵と文字とは異なった解釈を示しているのかと、応えた形になりました。

今回のサブタイトルは、挿絵を持つ近世の草双紙や明治期の文学、それに浮世絵などには有利でした。絵画との関係の比較的薄い古代・中世の発表はその意味で努力賞でした。発表自体がスライドやOHPを使い、資料も画像入りで、口頭発表と画像の関係を考えさせるものでした。

鈴木淳氏「フリーア美術館蔵高尾太夫図について」、斉藤愛氏「異人種への視線」、舘尾尚子氏「所謂『人生道中図』とその変容」は、資料そのものが自立した絵画であり、それを文学との関わりで論ずるという、まさに文学と美術の境界を行く発表で、「異人種」はシャープなテーマであり、新たな問題を提起してくれました。

『参天台五臺山記』を史料とした王麗萍氏「入宋僧の影像と真蹟」と舘尾氏「人生道中図」は、画像を視野に置くことによる新たな作品発掘であり、表世晩氏「『経国美談』の空間特質」は、この小説が当時としては世界文学的になり得た理由を、砂目石版画と挿入地図の面から明らかにしました。私たちからはやや遠い存在になってきている明治初期の作品の新たな発掘と言えるでしょうか。

松野館長はこの研究集会の意義の一つとして地元の資料を地元の人が調べて報告することにあると言われました。海外の資料を元に、海外の人が発表する、これにかなう発表が英訳版漫画『源氏物語』を取り上げたミヤケ氏「漫画にみる『源氏物語』」、王勇氏の講演「中国資料に描かれた日本人像」、発表者は海外の地元の人ではありませんが、アメリカのフリーア美術館蔵の「高尾太夫図」を資料とした鈴木氏、ブダペスト応用工芸美術館蔵の「根付け」を資料とした小池氏の講演「『行燈の中に座っていた狐』など」がありました。

今回は動かない絵、画像と言語表現の関係でしたが、趙美京氏「大江健三郎の『叫び声』から大島渚の〈絞死刑〉に至るまで」は映画〈絞死刑〉を取り上げていました。スライド・OHPなど限られた機器でどのように動く映像を理

解させるかの困難さを感じました。明年度のテーマは動く絵画・映像を取り上げ「境界と日本文学—映像と言語表現—」が発展的に考えられるでしょうか。映画・テレビはもとより、絵巻物や敦煌の変文、紙芝居、のぞきカラクリなども範囲に入るでしょうか。

今回のテーマに沿ってのことだと思いますが、2階展示室で行われている企画展「明治文学の創生と展開」で本館所蔵の明治本が展示されております。発表で取り上げられました『経国美談』も明治17年版（初版明治16年）が展示されており、発表の中にあった精密さや立体感を増した「砂目石版画」がよく分かります。ぜひ御覧になってください。

それでは、また明年この会場でお目にかかることを楽しみに、第24回国際日本文学研究集会を閉じることにいたします。ありがとうございました。

\*編集担当注……文中の発表題目は当日のもので、本会議録と異なるものがあります。